

日本地球化学会会長メッセージ

(東京大学大学院理学系研究科 教授) 鍵 裕之

(1) 学会会長としてのメッセージ (学会の使命と現状の課題も含む)

2019年9月19日の理事会の議決により会長を拝命いたしました。一般社団法人として3年目を迎え、Goldschmidt Conferenceの日本開催や近隣国とのMOU締結を済ませ、学会運営は無事に巡航飛行に入ったとも言えますが、1000人規模の学会を代表する重責を感じております。

日本地球化学会は1953年に発足した地球化学研究会に端を発し、1963年に日本地球化学会と名称を改め、2017年11月から一般社団法人 日本地球化学会として再出発し、現在に至っております。1966年から欧文誌 *Geochemical Journal* を、1967年から和文誌 地球化学を発刊しました。1994年には会員数が1000名を超え、2003年にくらしき作陽大学で、2016年にパシフィコ横浜でGoldschmidt Conferenceを主催し、Geochemical Society、European Association of Geochemistryと肩を並べる学会へと成長しました。さらに中国鉱物岩石地球化学会、韓国地質学会、中華民国地質学会 (Geological Society located in Taipei) ともMOUを結び、アジア各国との連携にも力を入れております。

学会活動の要は年会と学術誌の発刊にあると言ってしまうのではないでしょう。Geochemical Journalは冊子体の発行を基軸にしてきましたが、会員の方々の多くは電子媒体で購読されていることと思います。しばしば若手研究者から「Geochemical Journalはどれだけの研究者に読まれているのでしょうか？」という質問を受けます。完全オープンアクセス化を含め、Geochemical Journalの今後のあり方を、この2年間で丁寧に考えていきたいと思っております。

冒頭で本会の会員数が1000人規模と述べましたが、厳密には2019年7月末の会員数は895人で、残念ながら少しずつ会員数は減少しております。少子化が進んでいるこの時代において、右肩上がりの会員数増を目指ことは現実的ではありませんが、これ以上の会員数の減少は何とか食い止めたいと思っております。そのためには学会が魅力的なものである必要があると思っております。会員一人一人の満足度を上げ、何のために学会に入るのか、学会に入るメリットは何かを襟を正して考え直したいと思っております。

(3) 現学会は蛸壺化、閉塞感はないか、最新研究・教育の場となりえるか

当学会の会員数は多くありません。このような状況で学会の蛸壺化や閉塞感を払拭するためには、常に新しい血を学会に入れる工夫が必要と考えています。毎年開かれる当学会の年会は日本化学会を含む共催学会会員は日本地球化学会会員と同額の登録費で発表ができるだけでなく、会員以外の研究者も制限なく研究発表を行うことができます。また、学生が入会する際の障壁を少しでも下げるため、2年ないしは3年の期間を区切った学生会員パックという制度を設けています。また、年会を他学会と同時開催する試みも行っております。今年度も大学院生・若手研究者向けのスクールを開催する予定で、最新の研究・教育となるよう努力を重ねております。

(4) 政策提言・要望 (お考え、課題があれば)

本学会は気候変動や災害などグローバルな問題にも関連した研究を行う研究者が集まっております。今後、政府への提言などにつながる活動も展開していきたいと思っております。

(5) 化学連合へ期待すること

本学会は化学と地球惑星科学との間に位置する学際的な研究者の集まりです。地球惑星科学の分野では日本地球惑星科学連合という巨大な組織があり、本学会員の多くが参加しています。私の知る限り日本化学会に参加している会員は(残念ながら)多くありませんが、私自身は化学の出身ですので化学連合へのシンパシーをもっております。化学連合には政府からの情報、新たな活動の可能性などの情報をいただけること、加入学会の先生方との研究・教育上の協力関係を築けることを期待しております。

